

プロフィール

坂本 克也

三洋電機半導体の生産管理部門でSCM（サプライチェーンマネジメント）を行い、三洋電機IT部門へ移動してBI/DWHに着手。後に、社内ITコンサルタントとしてIT中長期戦略の立案から、全体最適化に向けた活動を通して縦割りから横串構造への改革を行うと共に、CIOサポートやIT人財育成にも力を入れてきた。

2009年4月からケペル株式会社でコンサルタントとして活動し、2010年6月より独立して匠 BusinessPlace の一員として本格的に活動開始。

1. 視点

企業内に位置する情報システム部門の存在価値、付加価値をどうすれば発揮して経営に貢献できるかの視点で考えている。

2. ユーザ企業主導で進める力は衰退したのか

企業内情報システム部門衰退の話在最近良く耳にする機会がある。本当に衰退しているのだろうか。でも、全ての企業がそうではなく、元気で積極的に活動している企業も多い。では、その差は何だろうか？情報システム部門トップ、会社トップの考え、それとも企業文化？等々様々な意見、考えがあることと思う。

この問題は、現状の企業内情報システム部門の役割が益々難しい領域に向かっている証拠であると考え。自部門の要員だけでは新しい技術、方法論、生産性などの持論を含めて話ができ、自ら先頭に立って困難な道を切り開く人材に枯渇している企業が少なくない。また、企業内の業務部門、上位経営層と協力しながら仕事を進めていける人材も沢山いるわけではない。

企業は自ら築いてきたシステム、サービスに対しては自信を持っていると思う。しかし、上記のように新たな分野への挑戦、様々な社内、外の人との仕事をしっかりこなす能力は、残念ながら情報システム部門の要員だけ完遂させることは非常に厳しい。そこで、SIベンダーの役割が貴重な存在となり、互いに補完しあいながら同じ目的に向かって邁進することになると考えている。

しかし、ユーザ企業はこの機会をとらえて、自らの役割をSIベンダーへと徐々に比率をシフトさせてきた。しかし、徐々に感覚が麻痺し、ユーザ企業が行わなければならない重要なミッションまでも、SIベンダーに依存する結末となってしまった。ここで、今一度ユ

一ザ企業は自らの役割、付加価値を再考して、どうすれば企業内に存在する情報システム部門の価値を最大限に活用させることができるのかを真剣に問わなければならない。

3. ユーザ企業内における情報システム部門の役割

プログラミングのプロを目指すのであれば、単にシステム設計書通りに開発すれば良いのかもしれない。しかし、これから（既に起きていることとして）はシステムを開発するだけの『待ちの状態』だけではなく、依頼そのものの信ぴょう性や潜在的な部分を掘り起こすことが必要になると考えている。そのためにも、現場に入り込んで業務で起きている通常業務やトラブルを自分の目で見て、体験しながらシステムを開発することが重要に感じる。

しかし、現状の企業内情報システムは分業体制で役割が決められている傾向にあり、細分化された範囲の狭い仕事を役割としていることが大きな障壁となる。利用者の要望をまとめる人、システムの設計をする人、プログラミングをする人、テストをする人、運用をする人。このスタイルが情報システム部門として最大のパフォーマンスを発揮する組織体制なのだろうか。これは、業務部門、経営層が本当に求めている事柄と合致する体制なのだろうかと何度も自問してみた。答えは『ノー』である。経営層から見た場合は、限られた予算の中で売上に貢献、業務の効率化、安定してサービス提供等々をすることが求められている。業務部門からは、要望に対して即座に反映してもらえるサービス、利用者自身で自由にカスタマイズできることなど、個々の細かいところに手が届くようなサービスを求めている。

かつてはシステム部門の社員が全ての責任を持って要望を聴き、企画から設計、開発、運用を一人もしくは数名でしっかりとこなしていた時代が存在したように思える。その頃の業務内容を現在と同じように少人数でこなすのは無理難題に思えるかもしれない。しかし、この『ゆとり教育』的な発想で企業が求める人材を育成することができるのかはとても疑問である。従って、今こそ1人の人間が大工の棟梁のように、自らも手を動かして仕事をし、全体の管理も行える人材を早期に育成しなければならないと考える。

以上